2026 NUSOM Summer Program に参加して

名古屋大学医学部医学科 5 年
吉村公佑（072200680）

1. はじめに

2025 年 7 月 7 日から 13 日までの 1 週間、NUSOM Summer Program に参加しました。このサマープログラムでは、名古屋大学の海外協定大学である米国のジョンズホプキンス大学、デューク大学、ノースカロライナ大学チャペルヒル校、カリフォルニア大学デービス校、英国のランカスター大学から 9 名の医学部学生を迎え、彼らと本学学生 13 名がともに日本の医療、特に地域・在宅医療、高齢者ケア、医療制度について英語で学びました。この 1 週間を通して、普段の臨床実習では得られない多くの貴重な学びを得ることができ、その中で素晴らしい交流の輪を広げることができました。

2. 活動内容

（1） 病院ツアー・診療科/ラボ見学

1・2 日目に病院ツアーとラボ見学が行われました。病院屋上のヘリポートや、手術室、ナースステーション、xR センターなどを Buddy と見学し、互いの国の病院における共通点や相違点について議論しました。当たり前だと思っていた病院の設備が他国では目新しいものであったり、逆に日本には無いシステムについて共有してもらったり、本学の学生にとっても新しい発見が多いツアーになりました。診療科見学では Buddy の学生が興味のある泌尿器科を訪れ、教授回診に参加したり、ラボや画像カンファレンスの見学をしたりしました。

（2） レクチャー

プログラムを通して多くの講義があり、様々な分野のお話を聴くことができました。1 日目の午後の医療倫理の講義では、新生児科のケースシナリオを軸にして患者家族と医師という二つの視点から議論し、医の倫理とその実践について理解を深めました。最終日の Desai 先生の講義では、One Health という観点から感染症の出現と流行、また各論について case study を通して学びました。

（3） 国立長寿医療研究センター訪問

2 日目の午後に訪問した国立長寿医療研究センター（NCGG）では、高齢者に特化した医療体制や応用技術について学びました。特にリハビリテーション室は非常に広く、バーチャルリアリティを用いたトレッドミルによる歩行・バランストレーニングや、脳卒中後の患者さんのための歩行支援ロボットなど、最先端のリハビリ技術を体験することができました。見学を通して、NCGG のような専門的診療を担う拠点病院の重要性を再確認しました。

（4） かがやき総合在宅医療クリニック・Come Come Swallow

3 日目と 4 日目には岐阜・美濃・名古屋を拠点に在宅医療・訪問診療を行っているかがやきクリニックを訪問し、市橋先生たち実践している多くの取り組みについて学びました。講義やアクティビティを通して、在宅医療は単に病院に通えない人が利用できる便利なサービスというだけではなく、医療費の削減や QOL の向上に繋がるなど、数多くの意義があることを学びました。また患者さんと関わって医療を提供していく上で、その患者さん自身の「生きがい」を中心に据え、最良のケアを考えていくアプローチが非常に面白いと思いました。

4 日目に訪問した Come Come Swallow では、嚥下障害に関する講義を聴き、実際に「見た目も美味しい」嚥下食を体験しました。

（5） グループワークについて

プログラムを通して特に Buddy と多くのグループワークに取り組みました。4 日目のかがやきクリニックでは、Buddy の Alfredo が実際に訪問診療見学で訪ねた患者さんのケースを題材にして関連図(Goal-oriented Bio-psycho-social concept map)を作成しました。グループで話し合いながら、患者さんの医学的問題だけでなく、心理的・社会的問題、さらに「生きがい」を含めて分析することができました。最終日には医療に関する複数のトピ

ックについて日米英からの視点からディスカッションを行いました。また最終発表では、一週間の出来事や感想、これまで話してきたたくさんのことを振り返りながら 3 人でプレゼンを作りました。これらのグループワークを通して、それぞれのトピックに関してより深い理解が得られたと同時に、日本ではあまり経験できないような英語を使ったアカデミックな討論の練習をすることができました。

3. 感想

1 週間のプログラムを通して、かがやきクリニックをはじめとする多くの施設を見学し、またレクチャーやディスカッションを通して、地域医療の理念や実践について多くのことを学ぶことができました。また、日本とアメリカ、イギリスとの医療の共通点や違いについても体感しました。そしてなにより、海外からの学生皆と友達になることができ、素晴らしいつながりを築くことができました。医学に関することだけではなく、お互いの学生生活や文化、音楽、言語や恋愛までいろいろな話をしたことはいい思い出です。このサマープログラムの後、将来それぞれの道で医師として活躍し、またどこかで再会できることを願っています。

4. 謝辞

このプログラムに参加するにあたって、国際連携室の粕谷先生、Alejandra 先生、長谷川先生、かがやきクリニックの市橋先生をはじめとするスタッフの皆様、Desai 先生をはじめとするプログラム中に講義をしてくださった先生方には大変お世話になりました。このようなたくさんの貴重な経験をさせていただき、心から感謝申し上げます。





